三菱庭球部が誕生する迄

大淵鉄太郎

丸ノ内陸軍用地八万四千坪、三崎町陸軍練兵場二万三千坪合計十万七千坪の土地を百弐拾八万円で払下げ願度いと云う願書を、明治二十三年三月五日提出した処先方はしびれを切らして待っていたらしく、第一師団監督部長の名前で、翌六日「願之趣聞届候事」と云う許可書が下附された。即ち丸ノ内は明治二十三年三月六日から三菱社の所有になったのである。

当時神田区淡路町二丁目十一番地所在三菱社に於ては、払下げ後の丸ノ内をオフィス街とする構想が既に出来ておったので、同年九月には「丸ノ内建築所」（課又は係に該当）を設けて丸ノ内の実施計画に当らせた。

翌二十四年には麹町区八重洲町一丁目一番地（八重洲ビル敷地）西南側に丸ノ内建築所の建物を新築して、本社より此処に移し、丸ノ内の建設に関する一切を此処で取扱わせる事とした。

翌二十五年一月より第一号館（東九号館「三菱銀行向側の建物」）の建築に着手二十七年十二月竣工したが、三菱合資会社（明治二十六年十二月十五日設立）は完成前の七月一日神田淡路町より、この新築建物に移転した。

明治二十七、八年に於ける日清戦争の大勝は、日本経済の発展を促進し、越えて同三十三年の北京に於ける義和団の変には列強に伍して、勇猛果敢に戦い、国威の発揚に大なる貢献をなした、従って日本の産業は益々発展の一途を辿るに至った。

明治三十六年には、三菱合資会社も、社業の発展に伴い人員著しく増加したので、社員相互の親睦と融和を計る目的のもとに組織だった倶楽部を設ける事となり「三菱運動倶楽部」と称し、丸ノ内建築所の一部を仕切って倶楽部室とし、此処に玉突場、碁、将棋室等を開設したのが、倶楽部の濫觴である。

明治四十三年十月一日丸ノ内建築所は、地所課所管となり、地所課営繕係となって第十一号館（昭和三十六年二月取毀千代田ビル増築工事中）に移転した。

移転後の丸ノ内建築所の建物は全部倶楽部建物として使用することとなり、之に附随した、材料置場や下小屋等を整理して、八重洲町一丁目一番

地（八重洲ビル敷地全部）は倶楽部の為めに開放され、翌四十四年より漸次倶楽部施設を拡充し、柔剣道々場、弓術場、更に敷地北西にはテニスコートを新設され茲に始めて三菱庭球部の誕生を見るに至った。

註　全国的に統合された三菱倶楽部は大正三年九月設立

七年目に再開されたＨＩカップ戦

戦争は昭和二十年に終結したのに、どうしてＨＩカップ戦は、七年間も放任していたろうと、疑問をもつ方々が、相当多い事と思われるので、その事に就いて、簡単に申述べて見たいと思う。

岩崎彦弥太様が、公職追放になったのは、昭和二十二年で岩崎様が経営されて居られるブラジルの農場が解除になったのは、昭和二十五年十一月であった。我々庭球部員は、この報に接し岩崎様も遠からず解除になられる前兆ではないかと、だれしも思う様になった。

終戦後、染井のテニスコートが逸早く復活したので、我々は度々会合を催し、その都度、岩崎様に御出でを願って、テニスをしながら一日を楽しんでいたが、ブラジル解除の報に接した時、催したテニスの集りは、非常に明るい気分で、誰の胸にも、ＨＩカップ戦の再開は時の問題であると考へる様になった。

果して翌二十六年六月、公職追放解除の朗報に接したので、早速中京、関西、九州の各方面にＨＩカップ戦を再開したい旨の連絡をした。

有志の人達四、五人で、岩崎様の御供をして九州方面迄も、テニス行脚に出掛けたのは其の頃の事である。それとなく各地の意向を探った処、何処でも我々と同様出来るだけ早く、ＨＩカップ戦の復活を望んで居る事がわかった。

全三菱縦横の連絡機関であった「三菱養和会」は、本社解体後「養和会」と改称、一般に開放される事となったので、全三菱縦横の連絡機関は、残されたＨＩカップ戦以外にはない。一日も早く再開しなければならない、好機は到来した、この機会を逃してはならないと、我々は早速再開の準備に取り掛った。

かくして、復活第一回ＨＩカップ戦は、岩崎様公職追放解除の翌二十七年、三菱関係各社の関心と、協力のもとに、千代田銀行コートに於て、石黒俊夫氏委員長となって、再開する運びとなった次第である。